日蓮宗新聞

平成２４年５月１０日号

千か寺参りへ行こう

32

絵と文　新聞記者　平山徹

「これから先代住職の通夜があるので、お寺はバタバタしています。そんな状況でもよろしかったらどうぞお参りください」。その日、最初に訪ねたお寺の参拝を終え、次のお寺に向かうにあたって電話を入れると、ご住職からそのような返事がかえってきました。私は一瞬戸惑いました。お通夜の準備と言ったら、相当忙しくされているのではないか。けれど「どうぞお参りください」と言ってくれている。どうしようか。近くまで来ているのだから行ってみようか。「それでは今からそちらに向かいます。よろしくお願いします」。私はそう述べて、電車とバスを乗り継ぎ、そのお寺を目指しました。

私は日蓮宗のお寺を千か所以上まわってきました。土曜、日曜、祝日にお寺を訪ねることが多いので、法事が行われていることは少なくありませんが、それにはもう慣れました。また、訪ねたお寺で、信行会が開かれていたり、本堂の落慶法要が行われていたりする場面に出会うことも何度か体験しました。そんなときは「あちゃー、今日はご首題をいただくのはむずかしいかな」と思うのですが、千か寺参りを続けていると、という事情をお寺の方に話すと、たいていは応じてもらえました。

ず～っと待ってて くれた住職

しかし、今回のように、これから先代のご住職の通夜が行われるという状況で参拝するというのは初めてでした。静かな住宅街に建つそのお寺に到着してみて、私は息をのみました。交通整理をする警備員、会場準備をする葬儀会社の職員、続々と駆けつけるお上人がた、てきぱきと指示を出す檀信徒の役員がた……。これでは本堂の前に一人たたずんでお経をあげるどころではありません。「バタバタしているとご住職が話していたのはこういう状況を言っていたのか。私の想像力が乏しかった。ご首題を書いていただく状況ではない」。私はそう判断しました。

ただ、電話で参拝することを伝えてありましたから、ひと言、ご住職にあいさつをして引き上げようと思いました。

ご住職は、奥さまと共に玄関に姿を現しました。「このような状況とは知らずに訪ねてしまい失礼しました」と私が話すと、ご住職は言いました。「『千か寺参りへ行こう』の記事を、亡くなった先代住職はとても楽しみにしていたんですよ。『うちのお寺にはいつ訪ねて来てくれるのだろう』ってずっと言っていました。さあ、ご首題をお書きしましょう」。奥さまからも「今日平山さんが来たことは、先代もきっと喜んでいると思います」と言われました。私は感激で胸が一杯になりました。ご首題帳を受け取った私は、本堂の前の長机に置かれた先代の遺影の前でお題目を三唱し、お寺を後にしたのでした。本当にありがとうございました。

筆者は全国紙の新聞記者。休日を利用して始めた法華霊場千か寺参りは、二〇一〇年七月に達成。読者の皆さんからの励ましのお便りに感激し、今度は二千か寺を目指す。千か寺参りの仲間・友人を広げることも新たな目標。二〇一二年五月一日現在、お寺からいただいたご首題・ご朱印の数は一三〇四。

平成２４年３月２５日
当山に来られました